

大学生の地域貢献活動を通じた地域防災

How should universities contribute to local disaster prevention?

石川敬之・村江史年・藤澤健児

北九州市立大学 地域創生学群
『地域創生学研究』 第4号 2021年3月

大学生の地域貢献活動を通じた地域防災

How should universities contribute to local disaster prevention?

石川 敬之・村江 史年*・藤澤 健児**

Takayuki ISHIKAWA, Fumitoshi MURAE, Kenji FUJISAWA

<要旨>

災害リスクが高まるなか、大学生による地域防災の取り組みが進んでいる。多くの大学生が地域住民とともに地域の防災力の向上を目指して活動している。大学生による活動が地域貢献につながるためには、その活動の継続が必要になるが、そのためには大学と地域が相互に調整しあい、大学生にも成長を感じてもらえるような仕組みづくりやサポートが必要となる。大学と地域、そして大学生の有機的な関係性が地域の防災力向上につながっていくのである。

<キーワード> 大学による地域貢献、地域防災、学生ボランティア、学生支援

1. はじめに

1.1 災害と大学

災害に強い地域をつくるうえで大学の役割は大きい。例えば大学教員は、その講義などを通じて災害や防災に関する知識を学生や市民に伝えることができる。また、研究や調査などによってさらなる知見を見出すこともできるし、自らの知識を活かして防災に強い街づくりの計画などに参画することも可能である。一方、大学そのものも地域の避難場所として機能している。実際、多くの大学では地域が被災した時のことを想定し、必要物資を備蓄している。また医学部を有する大学などでは災害時の特別医療体制などを整備しており、傷病者の受け入れや医療の提供を行うことが可能である¹⁾。

さらに、近年では大学生の存在も地域防災に大きな役割を果たしている。大学生が地域に向向いて地域の防災活動に参加したり、地域防災について一緒に考えたりといった事例が多く報告されている。大学生による活動は地域における防災への関心と意識を高めることにつながり、結果として災害に対する地域の防災力の向上に寄与するものになっている。

* 北九州市立大学 基盤教育センターひびきの分室 准教授

** 一般社団法人九州防災パートナーズ 代表理事

1.2 地域防災と大学生

もちろん、大学生が地域で活動しさえすれば地域防災が進むというわけではない。大学生は地域に受け入れられてはじめて地域住民と活動することができる。また、そうなることで地域防災にも貢献できるといえる。では、大学と地域のよりよい関係はいかに構築されるべきなのか。大学生の活動を継続させ、大学生の活動を地域の防災力につなげていくにはどうすべきなのだろうか。本稿の目的は、大学が地域の防災力に貢献するために求められる仕組みや条件について、事例を通じて検討することにある。事例では、ある学生プロジェクトの活動を取り上げ、地域による理解と支援が大学生の活動を充実したものにし、地域の防災力の向上に寄与していたことを明らかにする。また、地域と大学生の有機的な連携を生むために大学がなすべき実践的な含意についても確認していくことにする。

2. 本稿の課題とその背景

2.1 大学による地域貢献活動の広がり

近年、大学による地域貢献活動が広がりを見せている。地域に向けて開かれた大学が求められ、大学も地域に貢献するため、保有する様々なリソースを提供している。大学による地域貢献は研究と教育に並ぶ第三の役割として注目されるとともに、その重要性を高めている。

大学が行う地域貢献としては、市民向けの公開講座や講演会などの開催、また産学官連携を通じた協働研究や技術指導、さらに行政庁などの審議会、委員会への出席などがある。これらは主に大学教員によって実施、提供されるものである。

一方、近年の地域貢献活動では大学生もその重要な役割を担いつつある。大学生が地域のボランティア活動に参加したり、地域住民とともに地域の課題解決に取り組んだりすることが多くの大学でなされるようになってきている。大学としても大学生の地域貢献や地域連携を積極的に進めており、そのための学内組織、例えばボランティアセンターを設置したり、地域貢献活動をテーマとした教育プログラムを実施したりするなどしている。

2.2 大学生による地域貢献活動の意義

では、大学生がキャンパスを飛び出し、地域に出て活動することにはどのような意義やメリットがあるのだろうか。まず、大学生による地域貢献活動は、実質的に地域の課題解決の一助になる。従来、地域の課題解決に取り組むのは地域のNPOやボランティアであ

ることが多いが、そうした組織では活動のための資源が十分にあるというわけでない。したがって、大学生がボランティアとして協力することは地域で活動する市民や団体にとって大きな力となるのである。また、こうした大学生の協力は単なる人手不足の解消だけではなく、地域の課題解決や新たな価値の創造などにも寄与する可能性を持つ。実際、大学生が地域に入ることによって活動が活発になったり、新たな展開がもたらされたりすることもある。

さらに、大学生による活動は地域のためだけでもない。それは大学生自身のためにもなる。具体的には、大学生は地域での活動を通じ、大学の講義で学ぶ知識と現実社会とのつながりを知ることができる。そして、その経験はさらなる学習への関心や意欲の高まり、理解の促進にもつながっていくのである（桜井・津止、2009）。また、地域での活動は大学の講義だけでは学べない世の中の仕組みやルールを知ることでもある。地域において市民の方々との協働を成り立たせるためには様々な手続きや約束事を守り進めていかなければならないが、その実践を通じて大学生は市民性を獲得し、社会人として成長していく。こういったことから、大学生による地域活動は現在の大学教育の中でなくてはならないものになっているのである。

2.3 大学生による地域防災活動

以上のように、大学や大学生による地域活動が活発になりつつあるが、それは地域防災の分野でも見られるようになってきている。地域防災とはその言葉通り、「災害に対して地域の多様な主体が適切な役割を担い、また相互に連携協力することで地域全体の災害への備えを高める活動」のことを指す（「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」第3条）。ここには、地域における共助によって災害が起こった際の被害を極力減らすという考えが根底にあるといえる。そして、この「地域での共助」というものを支え、地域の防災力向上のために、大学、および大学生の活動が見られるようになってきている。例えば、地域の防災イベントへの参加や運営、地域ハザードマップ（被害予測地図）の作成などへの協力は、よく実施される活動であり、これらは大学の課外活動やサークル活動などで実施されることが多い。また、大学の授業やゼミ活動などを通じて防災に関する調査・研究を実施したり、地区防災会議などに学生委員として出席したりすることもある。これらは地域の防災に向けた専門知識の提供ということになる。こういった活動は、地域の防災力の向上にとって大きな貢献となるが、もちろん大学教員や大学生にとっても

意義がある。前述のように、活動に関わることで災害に対する自らの意識の向上や知識の獲得も進むからである。こうして地域と大学の双方が地域防災に対する積極的な活動を進めているのである。

2.4 大学による地域防災活動の実施に向けた課題

大学、または大学生による地域防災への取り組みは、近年頻発する災害や地震のリスクなどを考えても大きな意義がある。また、同じ地域に暮らす大学生自身にとっても災害から自分の身を守るという点では重要なことである。しかし、こうした地域防災活動は簡単に実現されるわけではない。そもそも大学が地域との協働をすすめるうえでは多くの課題が存在する。とりわけ緊急時の対応を見越した地域防災の取り組みを地域とともに進めていくうえでは、さらに多くのことが求められる。室崎（2018）によると、災害対応では連携する組織間のコーディネーション、コミュニケーション、コーオペレーション、コラボレーションが重要だとされている。なかでもコーディネーションが最も大切で、そのためには日常の活動や訓練などを通じた信頼関係や顔の見える関係をつくっておくべきだとする。これは大学と地域との関係においても当てはまることである。ただ問題は、そこに至るまでの過程である。大学と地域の関係においては、地域防災に向けた協働を開始することも、またそれを継続して成果を出すことも簡単ではないのである。では一体どうすればよいのだろうか。

2.5 本稿の目的

今日、地域における重要なアクターとして地域防災のための役割を果たすことは大学の重要な使命である。実際に災害が起こるリスクが高まりつつあるなかで、大学がその被害を可能な限り少なくするために日頃から地域防災の取り組みに関与し、地域の防災力向上に貢献することが求められているといえる。社会的存在としての大学が大規模災害に果たす役割は大きいのである。

しかし、大学が防災活動を進めていくには、地域に受け入れられる必要がある。そして、地域とともに活動を継続していく必要がある。また、このことは地域側にも同様に課されていることである。地域としても、大学、また大学生に継続して活動を行ってもらうための努力が必要となる。そのなかで地域貢献としての地域防災活動が成立するのである。この点に関連し、次章では、地域に受け入れられるとともに、地域の地域防災力の向上に貢

献している大学生の事例を見ていく。そして、大学と地域がうまく協働し、互いに信頼を構築するために必要なことは何か、また地域の防災力を高めるうえで求められる両者の協働のあり方とはどのようなものなのかを考えていく。

3. 事例

3.1 防犯防災プロジェクト (Mate's) の活動と地域防災

地域防災に向けた大学と地域の関係を検討していくうえで、本稿では北九州市立大学地域共生教育センターの学生プロジェクトとして活動する「防犯防災プロジェクト Mate's」(以下、Mate's) の地域活動を取り上げる。Mate's はその設立以降、地域と一緒に防災活動を行っている学生プロジェクトである。活動期間は10年を超え、現在も多くの学生が活躍している。また社会的な評価も高く、これまでに数多くの表彰を受けているが、何より優れている点は地元地域と友好な信頼関係を構築し、地域防災を担う主要なパートナーとして受け入れられているところにある。もちろん、Mate's と地域との関係は一朝一夕で成立したものではなく、継続した両者の努力によるものである。その結果、Mate's は10年を超えて地域に受け入れられ、地域の防災力の向上に貢献することができているのである。以下では、このMate's がどのように地域との信頼関係を構築し、地域防災に貢献してきたのかを見ていくことにする。またMate's の活動地域であった横代地区についても取り上げ、いかにMate's との協働を進めてきたのかを確認していく。

3.2 Mate's の設立背景

まずはMate's の設立とこれまでの活動について見ていくことにする。Mate's は2010年、北九州市立大学地域共生教育センターの学生プロジェクトとして発足した。当時、福岡県警察本部が北九州地区での防犯ボランティアの活性化について同センターに相談し、それに対応するかたちで有志の学生を募ったことがMate's 発足のきっかけとなった。また同時期、大学の近くを流れる紫川が氾濫したこともあり、防犯に加え防災にも取り組むことで地域住民の安全と安心にもつながる活動を目指すことにした。その結果、プロジェクトの名称も「防犯防災プロジェクト (通称: Mate's)」となった。

3.3 Mate's の活動内容

設立当初、Mate's は大学と同じ地域にある小倉南警察署と合同で地域防犯活動を行っ

ていた。例えば、小学生の登下校時の通学ルートの見守りや、犯罪抑止のためのピラ配りといった活動に参加していた。また北九州市内の小学校において「地域安全マップづくり」の指導も行っていた。「地域安全マップ」とは、犯罪が起こりやすい危険な場所や、逆に犯罪が起こりにくい安全な場所を示した地図のことであり、子どもたちの危険回避能力を高めるために作成されるものである。北九州市では小学校単位での「地域安全マップづくり」を進めており、この取り組みにMate'sも協力していた。ちなみに、この「地域安全マップづくり」は2013年から現在に至るまで継続して実施されている事業であり、毎年3校ほどの小学校にてMate'sのメンバーが指導を行っている。

一方、防災活動に関しては、防犯分野での協働を通じて関係性を築いてきた北九州市役所からの依頼で、「みんな de Bousai まちづくり推進事業」に参画することになった。地域の自発的な防災活動に関する計画である「地区防災計画」を地域住民と一緒に策定するもので、学生アドバイザーとして構想段階から取り組むことになった。

また、実際の災害被災地支援にも参加した。2014年に発生した広島土砂災害では、被災地の災害ボランティアセンターの運営に福岡県の代表として派遣され、現地での支援活動に従事した。続く2016年の熊本地震、2017年の九州北部豪雨、そして2018年7月豪雨においても、被災した自治体、もしくは被災地域の社会福祉協議会から依頼を受け、災害ボランティアセンターの運営、および災害ボランティアとして参加した。こうした被災地での活動や地域での地区防災会議に参加していくことでMate'sの活動は広く認知されるようになり、北九州市の総合防災訓練へのブース出展や北九州市内の小中学校での出前授業、さらには地元NPO法人と連携した防災教育への参加など、その活動を広げていくことになる。そして、これらの活動が評価され、多くの賞を受けることになるのである²⁾。

3.4 Mate'sによる地域防災活動 - 「よこしろ防災チャレンジ」への参加 -

様々な防災活動に関わっているMate'sであるが、地元である横代地区³⁾にて行っているのが、「よこしろ防災チャレンジ」への参加である。この「よこしろ防災チャレンジ」は、地元の小・中学校と連携して取り組む体験型の防災訓練であり、平成23年に発生した東日本大震災を教訓として開始されたものである⁴⁾。横代地区はそれまで大きな災害を経験したことがなく、防災への取り組みに積極的ではなかったが、東日本大震災の想定を超える甚大な被害を目の当たりにし、「自分の命は自分で守る」という意識を横代地区の子どもたちに持ってもらうとする保護者の要望により、小・中学校のPTAが合同で実施す

るようになったものである⁵⁾。

この「よこしろ防災チャレンジ」にMate'sが参加するようになったのは、2014年（平成26年）の第2回訓練からであった。当初は、まち歩きのサポーターなど、人手を必要とするイベントへの協力参加が中心であったが、その後、地域住民との顔が見える関係づくりが進むにつれて、参加するプログラムも多くなっていった。「よこしろ防災チャレンジ」を主催する横代校区まちづくり協議会としても、訓練のプログラムを充実させるためにMate'sの応援を求めるようになり、次第にプログラムの企画運営そのものを任せるようになっていった⁶⁾。そして、こういったMate'sの活動が横代地区の防災面に少なくない影響を与えるようになっていくのである。では、Mate'sの存在は「よこしろ防災チャレンジ」や横代地区にどのように影響を与えたのであろうか。

3.5 Mate'sとの関わりと「よこしろ防災チャレンジ」の変化 -学びとしての訓練へ-

上述のように、横代地区では災害に対する切迫した危機がなく、備えるべき対策も訓練もイメージしにくかった。そのため、東日本大震災で関心の高まった想定外の災害に備える避難訓練も、その後2～3回実施すれば参加者が減少し、地域における防災の取り組み意識は低くなっていった。また、地域住民の多くは備えるべき災害に対する対処法的な訓練は関心が高かったが、災害全般の基礎的な防災リテラシーを高めるような訓練には興味関心を示すことが少なかった。それゆえ「よこしろ防災チャレンジ」は、ある時期、その実施方針の再定義を行った。すなわち、訓練だけではなく、学びという視点を取り入れるということであった。ただ、なぜ学びだったのか。ここにはいくつかの理由があった。

まず、地域として防災教育が必要であり、地域全体で子どもたちを育てていくということを地域の関係者がいち早く共有したからであった。もともと横代校区は、地域と小・中学校のつながりが強く、地域全体で子どもたちを守り育む環境にあった⁷⁾。そこで「よこしろ防災チャレンジ」でも、子どもの教育のために地域の大人が協力する仕組みを作り、防災教育と一緒に体験しながら学んでもらうことを狙いとしたのである。地域住民に対する防災の取り組みで幅広い世代に参加してもらうことはなかなか難しいが、学校における防災教育であれば、少なくとも親子での防災訓練を実施することができる。このことは地域住民の防災力向上にとっても重要な意味を持っていたわけである。

そしてもうひとつ、このような意識や思いを実現していくうえで重要になったのが、まさにMate'sの存在であった。具体的な防災教育のプログラムに協力できるMate'sの存在

があったからこそ、「よこしろ防災チャレンジ」は学びの視点を入れた訓練に変わっていくことができたのである⁸⁾。実際、大学生という存在はその教育的観点からも非常に魅力的であり、特に子どもたちに対してはより近い立場から教えることができる立場にある。さらに、共に学ぶ存在としても親近感があり、子どもたちにとっては重要な存在であったといえる。このような意味からも、「よこしろ防災チャレンジ」に学びの視点を取り入れ、Mate'sの力を教育面で発揮してもらうことは自然な流れだったのである。これは次のような地域住民の発言にも表れている。

横代校区って災害が発生する想定がないから、そもそも防災に対する意識が高い方ではないと思う。そうした中で、大学生が被災地での活動の話をしてくれたり、小中学生と一緒に活動してくれたりすることで、地域全体の意識が変わっていくと思う。(地域住民・20代・女性)

またMate'sのメンバーの中には、実際に小中学生を対象とした防災講習や出前授業を経験しているものも多いた。したがって、そのような大学生が身近にメンバーにいれば、地域としても大学生と一緒に学びのプログラムを開発していこうということにもなる。さらに言えば、Mate's自身も学びのプログラムをポジティブに受けとめていた⁹⁾。例えば、Mate'sのOBは当時のことを振り返り、次のように述べている。

被災地域での活動を通じて自分たちの活動に対する意味付けができるようになり、自分たち自身がやらなきゃ、やりたいと言った気持ちが強くなって、防災ゲームを考える時のコンテンツにも活かされていったと思う。(Mate's OBの社会人・20代・男性)

こうして大学生としてのMate'sの存在が「よこしろ防災チャレンジ」に学びの要素を採用させ、防災訓練としての質を向上させていった。そして、この進化が訓練に参加する地域と住民の防災力をも高めていったのである。

3.6 住民同士をつなぐ役割と地域の活性化

以上のように、Mate'sの存在は横代地区の地域防災に影響を及ぼしていったが、果たした役割は他にもある。それは地域の活性化にも寄与したという点である。具体的に言う

と、Mate'sは地域住民をつなぐ存在となり、議論を活発にしたり、協働を促したりすることになったのである。例えば、Mate'sのメンバーは「よこしろ防災チャレンジ」での訓練に向けて数か月も前から地域住民と話し合いを重ね、一緒になって企画運営を行っていくが、このときMate'sの大学生としての存在が地域住民の活動に影響を与えている。これについて、Mate'sのメンバーや地域住民は以下のように述べる。

例えば、自分たちで話し合いをしたりするときに学生がいることで話が盛り上がりやすくなることってあると思うんですよね。地域の人たちとNPOや市役所の防災に携わる人たちだけで話をするとなると、対立じゃないけど、うまく話が進まない事もあると思うんですよね。学生はその間の結節点になっていると思います。(中略) 行政とかに言われると「また言ってる…」ってなるけど、学生がいることで、大学生の前では下手な事は言えないというか、そうした役割もあると思います。

(Mate's OBの社会人・20代・男性)

また、実際、大学生も自分たちが地域において重要な存在であることを認識している。これは次の発言からも明らかになる。

子ども達と地域の大人の間に立ったり、市役所と地域住民の間であったり、そうした間に立つことで、大人でもない子どもでもないちょうどいい感じの存在として大学生が懸け橋になっていると思う。特に災害や防災といった分野においては、住民同士のつながりが非常に重要になってくると思う。(大学生・20代・男性)

一方、Mate'sは単なるつなぎ役だけでなく、地域や「よこしろ防災チャレンジ」の活性化にも貢献している。

日頃なかなか接することのない世代の大学生と防災といった共通の話を通じて、自分たちだけでは気づけない大学生ならではの視点で話を聞けたりするのでいい刺激になっている。また、地域の役員の方々は高齢化していて、そうした人たちからは大学生と一緒に活動ができて元気がもらえるとっている。(地域住民・50代・男性)

「よこしろ防災チャレンジ」の最後に、当日の各会場での訓練の様子を収めた写真をつなぎ合わせて動画にして中学校の体育館で流すのをMate'sをお願いしている。こうした編集作業を地域だけでするとなるとかなり難しいけど、Mate'sの学生がいてくれて、写真を収めたり、動画を編集したりと、上手に作ってくれる。あの動画があることで会場での一体感を生み出してくれる。（地域住民・50代・男性）

地域単独でやろうとするとどうしても体力がないし活力がないし、雰囲気盛り上げていくのが難しい。なんぼマンパワーを集めたとしても、力がなかったり、若いエネルギーが足りなかったりする中で、大学生と連携することで新たな風が吹くと思う。（北九州市職員・30代・男性）

このように大学生としてのMate'sの存在は地域に様々な影響を与えていくことになる。敷田（2005）は、「よそ者」が地域に与える効果として「地域（や組織）の変容の促進」と「しがらみのない立場からの問題解決の提案」を挙げているが、Mate'sも住民同士をつなぐ架け橋となり、横代地区の防災力の向上に貢献していると言えるのである。

3.7 地域防災力としての受援力

Mate'sの存在は横代地区の防災訓練に学びの視点が導入されるきっかけとなり、それが訓練プログラムの質の向上をもたらすことにもなった。またMate'sのメンバーが地域住民の間に入り、仲介役やつなぎ役、あるいは適度な緩衝役となることで人々のコミュニケーションを促し、議論や協働の活性化にもつながった。そして、最後にもうひとつ、Mate'sの存在が横代地区の地域防災にもたらしたものがあつた。それは「地域の受援力」の向上である。受援力とは、支援を求める力、また支援を受け入れる力のことである。災害時の場合で言うと、被災地が必要な支援を適切に要請し、支援ボランティアを受け入れ、その力をうまく引き出すための力となる。受援力があれば、災害による被害の拡大をとどめ、迅速な復旧への対応が可能になるため、地域では平時から支援を受け入れるための準備をしておくことが求められている（本間、2014）。横代地区では、この受援力の向上においてMate'sとの関係性が大きな意味を持ったと言える。通常、受援力の獲得・向上には、支援者との協力関係や連携体制が重要なポイントになるとされているが、横代地区においては、Mate'sとの関係構築の経験が他のNPO団体やボランティア団体との連携に役

立つことになったのである。例えば、第1回の「よこしろ防災チャレンジ」では、横代地区以外からの協力団体は5団体であったが、直近の第7回訓練では15団体の協力が得られるようになってきている。また訓練に参加する横代地区内の団体も当初の11団体から16団体に増加し、参加人数も1000人から1400人までに増加している。さらに、訓練に参加した人々からはプログラムの改善や訓練運営の意見なども多く寄せられるようになってきたと言う。つまり、横代地区における防災の課題を外部の方が共有し、ともに課題解決のためのプログラム開発まで実施できるようになってきているのである。このことこそ、外部の人々が活動しやすい土壌としての受援力が横代地区に培われてきていることを示すものであると言える。また、このような外部の方々の方が防災課題に真摯に取り組む姿勢は横代地区の住民にも影響を与えている。長年、同地区において防災活動に取り組んできた藤澤氏は、「外の方が一所懸命やっているのだから自分たちも頑張ろう」という意識を持つ人が増えてきた印象を持っていると言う。これも横代地域の防災力向上を示すものであると言えるだろう。

以上が、大学生であるMate'sの活動が横代地区に与えた影響とその変化である。これらは地域と大学の関係を考えるうえで多くのことを示唆している。次は、この点について考えていくことにする。

4. 大学が地域防災に貢献するために

Mate'sの事例が示すように、大学生の地域貢献活動が地域防災に対して果たす役割は大きいと言える。一方で、大学生の地域活動が地域貢献につながるためには、大学そのものの役割も重要になってくる。大学生による地域活動の質を保証し、かつその継続性を担保するためには、大学が果たさなければならない役割もある。その役割が果たされてはじめて、大学生の地域活動は地域貢献となりうる。最後は大学生の地域活動を支えるうえで求められる大学の役割について、再びMate'sの事例をもとに考えていく。これは大学と地域とのあり方を考えるうえでも重要である。

4.1 地域との調整

前章で見たように、Mate'sの活動は横代地区の防災活動の促進とその結果としての防災力向上につながってきたが、そもそもMate'sが横代地区と継続して関わることができたのは、大学による支援体制が整っていたという背景もある。Mate'sは北九州市立大学

地域共生教育センターの学生プロジェクトとして活動しているため、その地域活動を行ううえで様々なサポートを受けることができたのである。

例えば、そのひとつにあげられるのが、地域での活動内容に関するものである。地域共生教育センターでは、教職員が学生と地域との間に入り、学生の活動が単なる人足的な手伝いにならないように協議している。大学には、日々、学生への協力依頼が届くが、そうしたものの中には活動内容が不明であったり、イベントの経費削減だけを目的としたようなものもある。センターでは、そうした単なる人手不足解消のための依頼をスクリーニングするとともに、地域での活動が学生にとって学びになるように調整しているのである。実際、Mate'sと横代地区との活動に関しても、センターの教員が両者合同のミーティングに定期的に参加したり、地域の受け入れ担当者と頻繁にやり取りをするなどして、地域での活動がMate'sのメンバーにとって望ましいものになるよう設計している。その結果、Mate'sのメンバーは横代地区での防災活動を有意義なものとして認め、そうであるがゆえに継続して活動を行っているのである。

また、こうした大学のサポートによって地域での学生の活動が活発になると、それは地域側にもよい影響を及ぼす。例えば、学生の活動がきっかけとなって地域住民も積極的になったり、新たな気づきを得たりすることがある。横代地区でもMate'sとの活動から防災訓練に学びの視点を取り入れられることになったり、住民間の交流が進んだりしたが、それはまさにこのような理由からであったと言える。学生と地域の関係を大学が取り持つことで両者の目的が達成できるのである。

4.2 学びとしての地域活動にむけて

また、地域共生教育センターでは、地域との調整だけでなく、学生の学びを促進させるための機会も創出している。センターには地域からの協力依頼が多く寄せられるが、大学として行うべきは、そのなかから地域への貢献と学生の学びに資するものを選択したり、新たに作り出したりすることである。Mate'sの場合で言えば、センターは横代地区での防災活動以外にも、北九州市をはじめとした地方自治体が主宰する防災イベントへの参加や地元小中学校への出前授業、また実際に災害を受けた被災地でのボランティア活動などを学生に紹介し、参加してもらっている¹⁰⁾。防災に関する様々な活動を行ってもらうことで学生の知識も増え、そのことがプロジェクト全体のレベルアップにもつながっていく。そして、それが地域貢献にもつながっていくのである。

4.3 プロジェクトを継続させるために

最後は学生プロジェクトを継続させるためのサポートである。地域共生教育センターに所属する学生プロジェクトは、どれも地域からの高い評価を得ている。もちろんそれは学生による優れた活動によってもたらされたものである。ただ、学生の活動が地域のためになり、また地域の方々に評価されるようになるには、まずもって活動の継続が必要となる。地域共生教育センターではこのことを念頭に、学生プロジェクトが継続するための仕組みを構築している。まず挙げられるのが、学生プロジェクトに対する日頃からの状況確認や情報共有である。学生プロジェクトのミーティングには教員も参加し、活動するうえで問題が生じていないかを確認している。同様に、学生の受け入れ先である地域側とも定期的に連絡を取り合っている。こうすることで大きなトラブルが生じないようにしている。

また、学生プロジェクトが継続していくためには学生自身のモチベーションも重要になる。センターの地域活動は課外活動であるため、大学の単位にはならない。したがって、プロジェクトに参加する学生が自発性を持って活動を続けてもらうために様々な工夫や仕組みの構築を行っている。例えば、センターでは、学生プロジェクトの活動成果を表彰する機会を多く設けている。学生にとっては地域での活動が評価されることは大きな励みになるため、年度末の成果発表会の開催をはじめ、各種団体が催すコンテストや表彰などにも応募するようにしている。また、学生自身が発表資料や応募書類を作成することで自分たちの活動を振り返ることもでき、それが地域での活動の発展にもつながっている。もちろん、受賞に至ることはさらなるモチベーションアップにもなり、地域活動の継続性につながっていくのである。

他にも、各種研修の開催、活動場所の提供、活動するための資器材の提供、助成金獲得のサポートといった、プロジェクトに対する支援を日頃から実施している。これらによって学生たちが地域で活動しやすくなり、プロジェクトとしても継続していく。このことが地域貢献の成果となっていくのである。

5. 地域防災をめぐる地域・大学・学生の有機的関係性

以上、本稿では、地域の防災力向上について地域と大学の関係から検討してきた。地域が防災や減災を進めていくうえでは大学生の存在やその活動が大きな意義を持っていたが、その活動をより有意義なものにするためには地域および大学が学生たちのポテンシャルを引き出す必要があった。学生の多くは地域に貢献したいということで活動に参加して

くれているが、学生自身も地域での活動を通じて自分自身を成長させたり、経験をつなげていきたいと考えている。地域はそのような学生の思いを汲み取り、学びの機会を含む活動の場をつくる必要がある。そうすることで学生のモチベーションも高まり、地域へのコミットも増していく。それが地域のためにもなっていくのである。

同様に、学生を送り出す大学も学生が地域で活動しやすくなるためのサポートが必要であった。ただ単に地域からの依頼を受けて学生を送り出すだけでなく、送り出す前の調整や送り出したあとのフォローが必要であり、それが学生のモチベーションと活動の継続性につながっていくことは前章で述べたとおりである。そして、活動が継続されることで地域への実質的な貢献にもつながっていくのである。

以上で考えると、災害に対する地域の防災力は、大学と地域、そして学生という三者の有機的な関係性が鍵になることが明らかになる。大学生が地域で活動しさえすれば地域の防災力が高まるわけではない。むしろ、地域や大学が学生のポテンシャルを引き出すことが、その後の望むべき展開につながっていくのである。

(注)

- 1) 例えば東北大学病院などでは、被災時には緊急の支援体制を敷くことができる『東北大学病院災害対策マニュアル』(<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/pc/pdf/saigai-manual.pdf>)より。
- 2) 主な受賞歴としては、2013年と2016年に福岡県警および福岡県防犯協会から「感謝状」、2016年には北九州市長より「安全・安心に関する活動団体」として表彰を受けた。さらに2018年3月には福岡県内で発生した災害での功績が認められ「福岡県防災賞」が授与されている。
- 3) 横代地区は北九州市小倉南区の中央部にあり、南側にはカルスト台地で知られる平尾台、東側の沿岸部に曾根干潟、北側には小倉都心につながる住宅地が広がっている。市街化が進んでいるが、まだ多くの田畑が残っており自然豊かな地域である。地区内には最大震度6弱が想定される小倉東断層が存在している。また水害については、大規模な河川はないが中小河川、農業用水路が多くあり内水氾濫の危険性がある。これまで記録に残る限り、校区内で自然災害による犠牲者を出したことはなく、住民の災害に対する危機意識は低い。
- 4) 横代校区まちづくり協議会、横代小学校、横代中学校、横代小学校PTA、横代中学校PTAが連携して実施する防災の取り組みであり、訓練プログラムには、多くのNPO、行政機関、社会福祉団体、大学生が講師・スタッフ等で携わっている多機関連携の訓練である。訓練は年1回、毎年5月末～6月初の土曜日午前中に実施されている。これは小中学校の年間行事及び地域住民の出水期前における避難の手順（連絡網）を確認することの調整により決められている。
- 5) 小・中学校の理解、また地域にも協力してもらうことにより、「よこしろ防災チャレンジ」は、2013年（平成25年）6月8日に第1回の訓練を実施した。その後、2020年までに7回開催され、毎回、小中学生が約1000人、地域住民が約300人、そしてNPOメンバーと大学生が約100人参加する大規模な災害対応活動となっている。
- 6) Mate'sが2018年以降で参加したプログラムをあげると、グループワーク（Bousai運動会）、テント設置訓練（めざせテントマスター）、タウンウォッチング（プラヨコシロ）の訓練に講師およびスタッフなどがある。なかでもグループワーク（Bonsai運動会）では、プログラムの企画、運営を講師として担っており、小中学校の先生方との打ち合わせや地域役員との調整も実施している。そしてMate'sは2021年現在も「よこしろ防災チャレンジ」に継続して参加している。
- 7) 横代校区の最大の特長の一つが「一校区一小学校一中学校」である。このため横代校区は様々な面で、小学校、中学校、校区の連携した取り組みが進んでいる。この点をいかに防災活動につなげて地域の災害対応力を向上

大学生の地域貢献活動を通じた地域防災

させていくことが出来るかが課題であったが、その中で「よこしろ防災チャレンジ」での学びは、まさに地域の強みを活かした取り組みであり、ハザードがない地域における防災教育を通じた地域防災力の向上を図るうえで有効に機能したといえる。

- 8) Mate'sのメンバーは「よこしろ防災チャレンジ」において、小中学生を対象とした防災学習を地域住民と一緒に指導していた。小学5年生と中学1年生を対象とした防災運動会では、実際に身体を動かしながら災害時の対処方法を教えていた。また、中学生が小学生に災害時のシェルターとしてのアウトドア用テントの張り方を指導するといった場面では、事前に中学校に赴き「先生」として出前授業も行っている。
- 9) また、「よこしろ防災チャレンジ」に「学び」の要素が取り入れられ、プログラムが充実していくことは参加するMate'sのメンバー自身の成長にもつながっていくものであった。大学生の中には地域住民と同じ地区内で生活するものも多く、参加を通じて防災についての知識を学ぶことになれば、それは地域における防災人材の育成にもなる。大学生が地域防災人材になることは「よこしろ防災チャレンジ」としても重要なことであった。このような観点から学びという視点を取り入れられることになったのである。
- 10) 2016年の熊本地震、2017年の九州北部豪雨、そして2018年7月豪雨の際には、被災した自治体もしくは被災地域の社会福祉協議会から直接依頼を受け、地域共生教育センターとして、Mate'sのメンバーを中心に災害ボランティアセンターの運営メンバーとして派遣を行った。

参考文献

- 桜井政成・津止正敏 (2009) 「ボランティア教育の新地平」 ミネルヴァ書房。
- 敷田麻実 (2005) 「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江湾の久爾』 pp.74-85。
- 本間照雄 (2014) 「災害ボランティア活動の展開と新たな課題—支援力と受援力の不調和が生み出す戸惑い—」『社会学年報』 第43 卷 p. 49-64。
- 室崎益輝 (2018) 「災害時に対応できる組織とは」 公立大学連携地区防災教室ワークブック編集委員会・大阪市立大学 都市防災教育センター 『コミュニティ防災の基本と実践』 大阪公立大学共同出版会。

